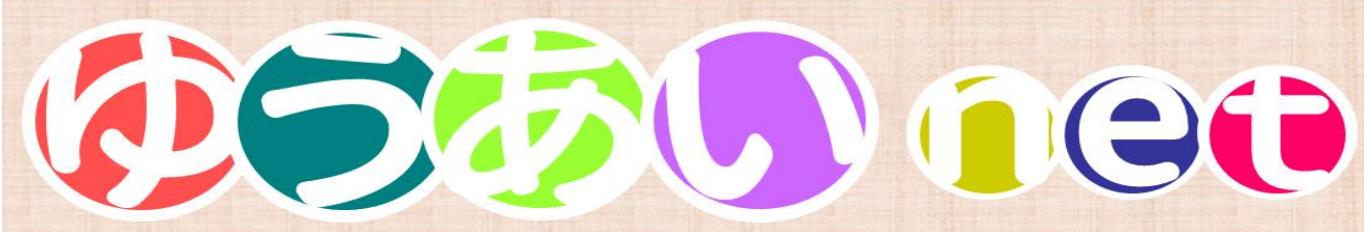


佐賀県の視覚障害教育を結ぶ



新しい年が明け、三学期が始まりました。そして、この時期といえば入試シーズン。中学入試を皮切りに、高校入試や大学入試のニュースが目につきます。しかし、例年より高い気温とはいえる一年で最も寒さの厳しい時期でもあります。インフルエンザなどの感染症も流行していますので、体調管理には十分お気を付けください。

視力検査

視力検査は、目の状態を確認し、日常生活を快適に過ごすために欠かせない大切な検査です。

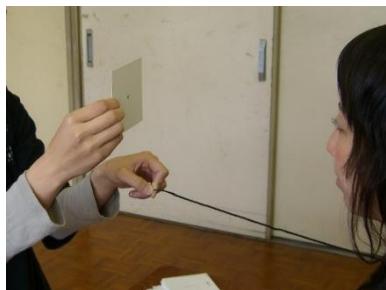
最も一般的な検査はゆうあいnet 6月号で紹介した「遠距離(遠見)視力検査」で、ランドルト環などを使い遠くを見る力を測るもので、これ以外にも「近距離(近見)視力検査」と呼ばれる、読み書きや手先の作業などの見え方を測る検査があります。また、「見える最小の視標(ランドルト環など)が、どれくらい近づければ見えるか」を測る「最大視認力検査」というものもあります。

視力以外の視機能検査としては視野範囲を測る「視野検査」や水平や前後に動いているものを測る「動体視力検査」、赤緑・青黄色などの色の識別異常を評価する「色覚検査」などがあります。

これらの検査を組み合わせることで、視力だけでなく総合的な視機能を把握し、適切な矯正、補助具の選定などにつなげることができます。

近距離視力検査

近距離視力検査は、目から30cm離した専用の近距離視標の文字やランドルト環の切れ目がどれくらい見えるかを測定する検査です。



検査はひもをつけたダブルクリップを襟につけてもらい、30センチの距離を保持します。そして近距離視標を目の高さに提示して行います。

「上、下、左、右の4方向を提示する」「5回中3正答で次の段階へ進む」「正答が3回に満たなくなったら、その一段階前の視標が視力値となる」「以前の検査結果がある場合は、その視力の2~3段階程度大きい視標から始める」「正答、誤答は伝えないが、記録は残す」というのは、遠距離視力検査と同じです。(ゆうあいnet 6月号参照)

専用の視標が必要となるため、学校ではなじみのない検査ではありますが、遠距離視力値が問題なくとも「教科書を極端に近づけて読む」「画数の多い漢字の書き取りを苦手としている」などのことから検査をすると、近距離視力値がとても低いこともあります。

学校にそういう児童生徒がいる場合は盲学校にご相談ください。

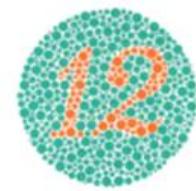
色覚検査

いくつかある視力検査の中でも、今回は12月号で紹介した色覚の状態を調べる「色覚検査」について紹介したいと思います。

【主な色覚検査法】

石原式視覚異常検査

色点で数字や模様を構成した「石原式色覚検査表」を見せ、識別できるか確認する。



石原式色覚異常検査の例

色相配列検査(パネルD-15テスト)

色票を正しい順序に並べるテスト。色覚が正常か異常か、異常ならその種類がわかる。

アノマロスコープ

赤と緑の混色を調整し、黄色に見える比率を測定。色覚異常の種類と程度を診断する。

以前は学校でも色覚検査が行われていましたが、弊害もあるということで平成15年度に行わないこととなりました。その後、平成26年に「児童生徒等が自身の色覚の特性を知らないまま不利益を受けることのないよう、保健調査に色覚に関する項目を新たに追加する」ように定められました(学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令-平成26年文部科学省令第21号)。

石原式色覚検査表は学校でもよく使われるものです。しかし、いわゆるスクリーニング検査であるため、「色覚異常の疑い」と判定するものでしかありません。そのため、検査で問題が指摘されたり、色覚が気になる児童生徒がいたりした場合は、まず眼科受診を勧めてください。

視機能について その3

視機能については今回が3回目で、1回目の11月号では「視力」「視野」、2回目の12月号では「光覚」「色覚」について紹介しました。そこで、今回は「眼球運動」と「両眼視」について紹介します。

眼球運動

眼球運動とは、視線を目的の対象に合わせるために眼球を動かす機能のことです。正確な視覚情報の取得に不可欠なものです。主な種類は以下に示す通りです。

固視運動： 視線を一点に安定させる動き。微細な調整(微動)で像の鮮明さを保ちます。これにより人の顔や文字、画像などを正しく捉えることができるようになります。

跳躍性眼球運動： 視線を素早く別の対象に移す運動。読書などでの行末から次の行頭への視線移動がこれにあたります。

追従性眼球運動： 動く対象などを滑らかに追う運動。スポーツや運転などで重要となります。また読書などで文字列を一字ずつ捉えることにも重要な役目を果たします。

輻輳・開散：見る対象との距離に応じてピントを合わせる運動。通常は対象が近づくと輻輳（いわゆる寄り目）になり、遠ざかると開散していきます。この運動に問題があると「黒板の書き写しが遅い（遠くの黒板と近くのノートで、それぞれピントを合わせなければならないため）」などにつながります。

前庭動眼反射：頭の動きに応じて、眼球を反対方向に動かし、視線を安定させる反射をいいます。

眼球運動は学習や運動などでの視覚的認知に重要な役割を担っています。眼球運動には視力、眼疾患の種類や視野などのさまざまな要因が影響しているため、その状態は一人ひとり異なります。そのため、弱視児の指導においては、眼球運動を含めた実態把握がとても重要な意味を持っているといえます。

両眼視

両眼視とは、左右の眼で同時に対象を見て脳で統合し、一つの立体的な像として認識する機能をいいます。これにより、奥行き感や距離感を得ることができます。そのため、両眼の視力差が大きかったり、斜視があったりする場合は両眼視がうまくできず、遠近感がうまくつかめなかったり、ものが二重に見える複視が起きたり、ピントが合いにくくなったりすることがあります。

かつては地理の教科書に空中写真が載っており、左・右の写真の間に下敷きやノートを立て、立体視を行った経験のある方もいらっしゃると思います。あれも両眼視の視機能を使ったものです。日本地図センターのサイト(<https://www.jmc.or.jp/keihatsu-kyouiku/faq/faq-photo-list/faq-photo-q6-sample/>)にサンプル画像がありますので、お試しください。

参考文献・資料

日本眼科医会 <https://www.gankaikai.or.jp/colorvision/>

佐藤泰正 編(1991)『視覚障害学入門』学芸図書。

山口真美・金沢創(2008)『赤ちゃんの視覚と心の発達』東京大学出版会。

高橋広 編(2002)『ロービジョンケアの実際 ー視覚障害者のQOL向上のために』医学書院。

佐賀県立盲学校 電話 (0952) 23-4672 FAX (0952) 25-7044
代表メール mougakkou@education.saga.jp

お気軽に御連絡ください。巡回相談の依頼も受け付けています。

佐賀県立盲学校公式 PR キャラクター

「さもー」

